

ある野心

雨

有森信二

わたしの手の部品をはずす
わたしの足の部品をはずす
わたしの首の部品をはずす
わたしの頭の部品をはずす
わたしの腹の部品をはずす

それらはひとりでに
わたしに近い牛になる

たくましい腕を空が
かすめとつてしまったので
なにもかも
かたつむりになる

一頁

兜の下
洗われたばかりの首が
空つ風に
吹き晒される

抒情

氷河期

吠えすぎた犬
連帯とは
紙屑

歯ぎしりの後の
バンジージャンプ

覚醒

まわりくどい夜がきて
上からのぞいたら
化石した時間が
点々と点々とこぼれ
真白い入口付近に転げ出た
ピラミッドがひしやけていた

すずめが松の枝で
虫を食っていた

てっぺんから
飛行機が落ちてきた

そのとき
魂と魂がぶつかった

秋

電車の中で
流れる風景が
ふいに
舌を噛み切ろうとした

明るい昼

昼食時はもうとうに過ぎた
というのに

昨日からの細かい雨は
音もなく降り続けている

二階の二人は
昨夜の激しく狂おしい
営みの果てに

昼食時はとうに過ぎた
というのに

それぞれの
足と手とを縛り合い

まだ二階の二人は
涎を流し
眠りこけている

一瓶の薬を空にし
りんりんりんりと走り
ほうほうほうほうと上り
るらるらるらと漂い

蛇口から滴り落ちる水は
すっきり
洗面器を満たしこぼれ

涎を流し
こんなに明るい昼を
眠り呆けている

それにしても
めっぼう明るい昼である